

ヒッタイト帝国のビールとワイン

—古代アナトリアの飲酒文化—

津本 英利

Beer and Wine in the Hittite Empire: Drinking Culture in Bronze Age Anatolia

Hidetoshi TSUMOTO

後期青銅器時代のアナトリアに栄えたヒッタイト帝国の遺跡からは、文字史料と考古資料の両面から、古代のビールとワインに関する様々な知見が得られている。とりわけビールについてはクシャックル遺跡において生産址と考えられるものも発見されている。ワインについては直接生産を示す遺跡は発見されていないが、文字史料から豊富な情報が得られている。酒器などの考古資料も、間接的に古代アナトリアの飲酒文化について物語る。

キーワード：ヒッタイト、クシャックル（古代名サリッサ）、飲酒文化

Written records and material from archaeological sites of the Hittite Empire that flourished in late Bronze Age Anatolia have provided information about the consumption and production of ancient beer and wine. In particular, the remains of a possible brewery have been found at Kuşaklı (ancient Sarissa). No remains of a winery have been discovered so far, but detailed information about ancient wine can be obtained from Hittite written records. Artefacts such as drinking vessels also provide information about the drinking culture of ancient Anatolia.

Key-words: Hittites, Kuşaklı-Sarissa, drinking culture

はじめに

アナトリア（概ね現在のトルコ共和国のアジア側部分）はビールの原料となるムギの栽培が世界で最初に始まった地である。またブドウから作られるワインについても、古代人は最古のワイン造りがアナトリアで始まったと考えていた。現在のトルコ共和国は人口のほとんどがイスラーム教徒ではあるが、政教分離の建前もあり、飲酒には比較的寛容な国柄である。消費量こそブドウから作る蒸留酒ラクに首位の座を明け渡したものの、ビールもワインも変わらず愛好されている。

古代のワインやビールについては実態が不明な点が多く、文字史料があっても考古資料が欠けていたり、またその逆の場合も多かったりすることが多く、実際の製造や流通の実態、飲用の場面や文化的な意味合いなどについては断片的な知見に限られている。そのような中、今から3600～3200年前の古代アナトリアに栄えたヒッタイト帝国については、楔形文字粘土板を中心とした文字史料も、発掘調査によって得られた考古資料も、ビールやワインについて一定の知見が得られている。本稿ではビールとワイ

ンにまつわる考古資料を中心に、文字史料の解説による知見も参照しつつ、ヒッタイト帝国の時代を中心とした古代アナトリアの飲酒文化について紹介したい。

アナトリアのビール

ヒッタイト文字史料に見るビール

アナトリアは世界最古の農耕が始まった地域の一つであり、ビールの原料となるオオムギの栽培が始まった地域と考えられるが、ビール自体の始まりは詳らかではない。南東アナトリアにある前期青銅器時代（前3千年紀）の遺跡であるイマムオウル・ホユック（İmamoğlu Höyük）からは、壺を挟んで向かい合うように椅子に座る二人の人物が、それぞれその壺に何かを注いだり、曲がった棒状のもの（ストロー？）を壺に挿したりしているのが描かれた彩文土器片が出土しており（図1）、ビールを飲んでいる場面とも解釈されている（Weisgerber 2005: 164, Abb. 11）。

メソポタミアやエジプトではビール生産に関する文字史料・図像資料が数多く伝わっているものの、アナトリアでは文字史料が登場する前2千年紀まで待たなくてはならな



図1 イمامオウル・ホック出土彩文土器片に描かれたビール飲酒場面 (Weisgerber 2005: Abb. 11)

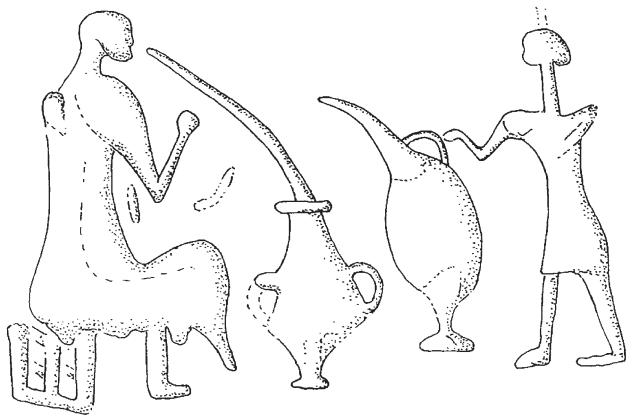


図2 キュルテペ出土印影に表された飲酒場面 (Müller-Karpe 2005: Abb. 2)

い。そしてその史料に登場するビール関連用語はメソポタミアの影響を強く受けており、メソポタミアからビール作りが伝わったとする考えもある。この前2千年紀初頭、中央アナトリアには交易を目的としてアッシル (Assur) の商人が居留地 (「カールム」*karum*) を営んだが、その遺跡の一つであるキュルテペ (Kültepe) (古代名カニ

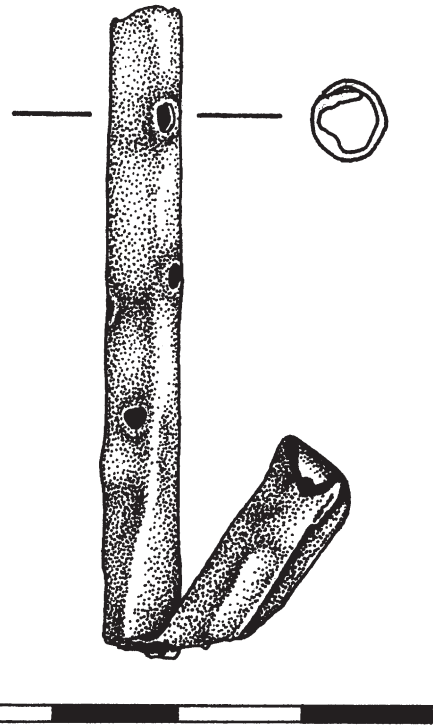


図3 クシャックル出土青銅製濾し器 (Müller-Karpe 2005: Abb. 13)

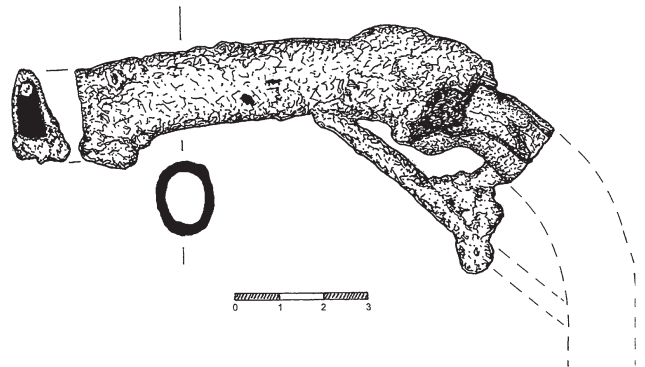


図4 ウルブルン出土鉛製濾し器 (Weisgerber 2005: Abb. 1)

シュ Kaniš) から出土する円筒印章には、ストローでビール (と思われるもの) を飲む場面が刻まれており (図2、Müller-Karpe 1988: 26)、文献史料と図像資料の両方で、ビールが飲まれていた可能性を示す証拠が出揃う。

前1600年頃に始まるヒッタイト帝国時代の粘土板文書史料には、ビールが多く言及されている (この節以下

Ünal 2005を参照)。「ビール」はヒッタイト文書内ではシュメール語から借用した楔形文字(スメログラム)で *KAŠ* と表記された。ヒッタイト語楔形文字では *šeššar* である。他にも「若ビール (*DUG.KA.GAG*)」、「蜂蜜ビール (*KAŠ.LĀL*)」、またビールを他のものと混ぜたカクテル状の多種多様な飲料が言及されているが、実際に何を指すかは不明なものがほとんどである。

ビール生産や流通に関わったと思われる様々な職名(「ビール生産者」「ビール醸造者」「献酌人」「ビール蔵管理人」)が言及されているが、その実態も何を指しているのか分からないことが多い。また ^E*arzana-/arsana-* という言葉は酒場を指す場合もあるが、場合によっては売春宿や宿屋も指していたようである。出産祝いなどの贈答に使われた他、ビールは配給されるものでもあったが、神殿の職員が私して罰せられた裁判記録も残っている。

ワインに比べると、ビールはより日常場面に近い飲料だったようだが、ワインとともに神々への捧げ物や儀礼の場面でも使われている。火葬の際の火を消すのに、ワインとともにビールが使われた。ヒッタイト人は神々が自分たちと同じものを食べると考えていたので、その日常に食べていた食物を神々に捧げていたが、その順序は「パン、ビール、そしてワイン」、ついで肉の順で羅列されており、いかに日常的に摂取されていたかが窺える。

また日常的な飲料というだけでなく、その酩酊効果も利用されていた。ヒッタイト神話には天候神がイルヤンカ竜をビール(あるいはワインか?)で酩酊させて退治する物語がある。また神々の怒りを鎮めたり機嫌を取ったりする捧げものとされたり、踊り子が踊る前に飲んだりもされていた。健康のために薦められたり、治療行為にも用いられていたりことを示す文書もある。

ビールに関わる器物

ビールと共に言及される器具の名称としては、*KUKUB* (水差)、鉢 (*GAL*, *aššuzeri-*)、「ビールの容器」(*DUG KAŠ*)、銀の水差し (*ZA.HUM*)、リュトン (*BIBRU*)、「ビールを酌する容器」(*DUG KAŠ ašnummaš*)、灌奠容器 (*išpantuzzieššar*)、柄杓 (*hanišša-*) など多種多様にわたり、その他正確な意味が判明していない多数の器具が言及されているが、その多くはどのような形状だったかは分からない (Ünal 2005: 169)。

当時のビールは濾過されておらず沈殿物が入ったまま飲んでいたのであるが、そのためにストローの先に金属板に小さい穴を開けた漉し器を付けたものを使用していた(図3)。青銅や鉛で作られていたこのような器物はメソポタミアに起源があると思われ、とりわけ26点が後期青銅器時代の層から出土したテル・ムンバカ (Tell Munbaqa)

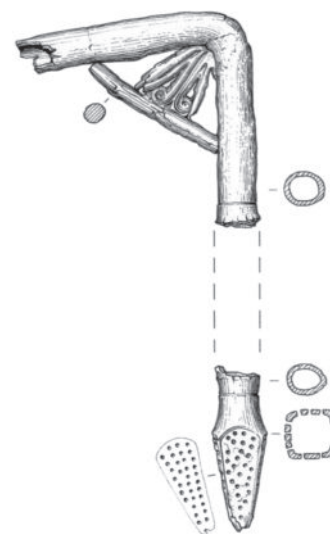


図5 アマルナ(エジプト)
出土鉛製漉し器 (Weisgerber 2005: Abb. 2)

をはじめとする前2千年紀のシリアに出土例が多い (Czichon und Werner 1998: 92)。アナトリアには前2千年紀に入ってから登場し、出土地としてはアッシリア商業植民地時代のキュルテベ (Kulakoğul and Kangal eds. 2010: 292)、ボアズキョイ (Boğazköy) (帰属時期不明、Boehmer 1979: 2-3, Taf. II, 2501 および 2502) およびヒッタイト帝国時代のクシャックル (Kuşaklı) (Müller-Karpe 2005: 181, Abb. 13) が挙げられる。またトルコ南部ウルブルン (Uluburun) 沖の海底で発見された前1300年頃の沈没船からは、この漉し器の一部と思われる鉛製品が発見されている(図4、Weisgerber 2005)。この器具はシュメール語で ^{G1}*A.DA.GAR*、ヒッタイト語では *ummiya-* と呼ばれていた (Ünal 2005: 169)。エジプトのアマルナ (Amarna) 発見のシリア出身者の墓碑(ベルリン美術館蔵)には、被葬者がウルブルン発見のものと同様の器具で壺からビールと思われる液体を飲んでいる図像が彫られており (Weisgerber 2005: 159, Abb. 5)、また同遺跡からは実際に鉛製のフィルターが出土している (図5、Weisgerber 2005: 157, Abb. 2)。

ビール醸造室の発見

ビールの原料となるオオムギは、悪条件(土壌、降水量、気温)の下でも一定の収穫量が見込め、日常食用するのみでなく備荒作物や家畜飼料としても、青銅器時代の西アジアにおいては重要な穀物の一つであった。ヒッタイト帝国もまたその例外ではなく、ヒッタイトの首都の遺跡ボアズキョイで発見された植物遺存体の分析結果によれば、オオムギがアインコルンコムギと並んでもっとも多く発見

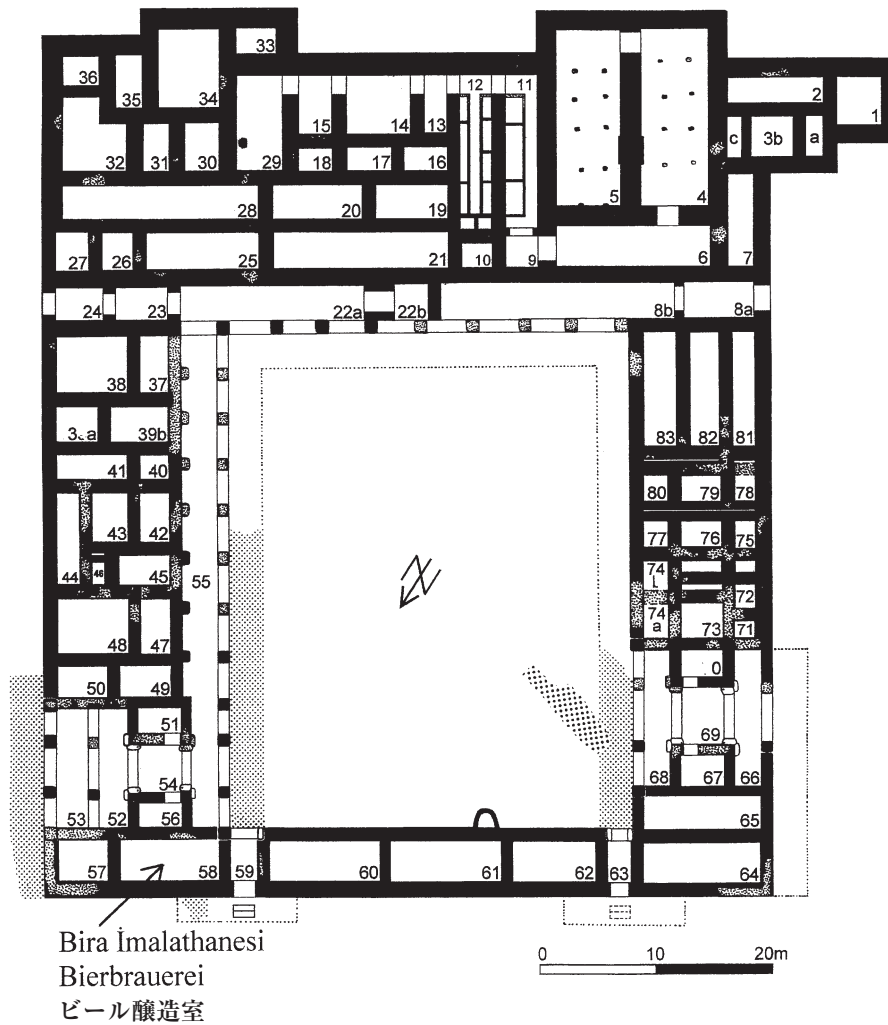


図6 クシャックル建物C (Müller-Karpe 2005: Abb. 3)

されている (Dörfler et al. 2011: 107, Fig. 3)。

ヒッタイト帝国の時代にビールが作られていた明確な考古学的な痕跡は、ヒッタイト帝国東部の地方都市であったクシャックル (古代名サリッサ Sarissa) での発掘で初めて発見された (Müller-Karpe et al. 2000; Müller-Karpe 2005)。この都市最大の建物であった建物C (図6) は天候神の神殿であったと思われる、年輪年代測定や放射性炭素年代測定、原位置で出土した土器の年代観により、この建物は前16世紀第4四半期に建設され、前14世紀前半に炎上・崩壊したものと推測されている。

筆者も参加していた1999年の発掘調査の際、その建物の北西の出入口に近い一室 (58号室) から、27点の完形土器が折り重なるように原位置で発見された (図7)。その内の一つ、大型壺の内部から採取された150リットルの土の中から、炭化した二条オオムギ (*Hordeum vulgare distichum*) が大量に発見され、発芽したものや熱を受けて変形したものが含まれていたことから (図8)、ビール

製造に関わる土器であることが判明した (Müller-Karpe et al. 2000: 348-350)。またこのオオムギは比較的大粒のものが多く、ビール醸造のために選択的に使用されたものと考えられる (Dörfler et al. 2011: 106)。この壺は高台が付いた独特な形状をしているが、同様な壺はヒッタイトの首都ボアズキョイで出土した土器の器面に貼付文様で表現されている、ストローらしきものが挿されている土器と似ている (図9, Müller-Karpe 2005: 180)。

さらにこの58室出土の27点の土器には、麦芽製造 (煤のついた小型容器、浅鉢など) から発酵 (底に穴の開いた丸底広口大型壺)、そして貯蔵・運搬 (大型の長頸壺) に至るまで、ビール製造の一連の工程が復元できるだけの器種が揃っていた。天井から吊るした丸底広口大型壺の内部でアルコール発酵を行い、その底の穴から高台付壺内にビールを流し、長頸壺に移して保管・運搬したものと想像されている (図10, Müller-Karpe 2005: 178)。この醸造室の様子は、現在最寄りのシヴァス考古学博物館で出土状

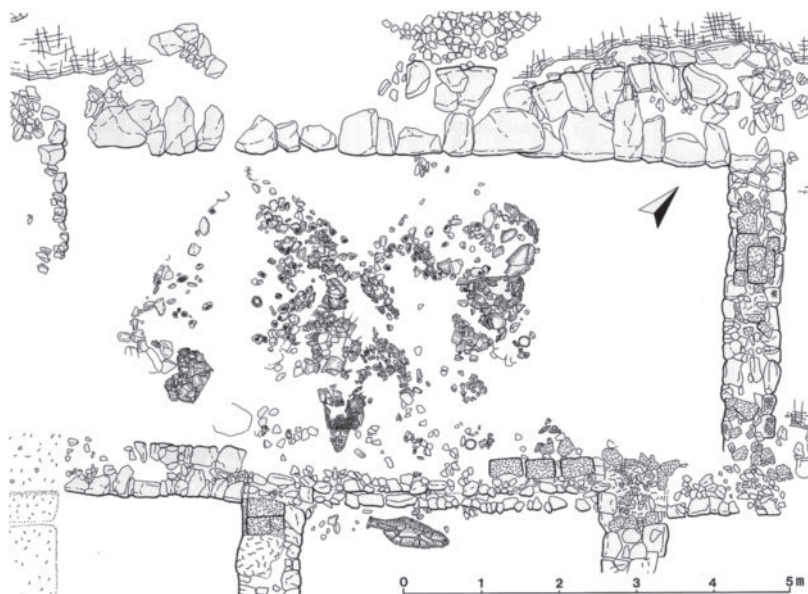


図7 クシャックル建物 C58 室の土器出土状況 (Müller-Karpe 2005: Abb. 4)

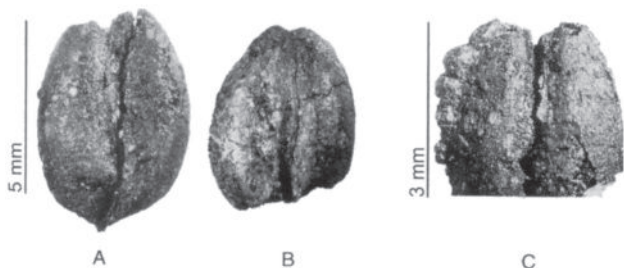


図8 クシャックル建物 C58 室の土器内から出土したオオムギ (Müller-Karpe et al. 2000: Abb. 23)

況に基づいて再現され展示されている。

このクシャックルでの発見により、ヒッタイト語の文字史料で知られていたビールに関わる様々な器種について、そのセット関係がある程度明らかになった。さらには容量の比較から、容積に関する度量衡も実際の考古資料で復元できた (Müller-Karpe 2005: 179, 2015)。すなわち、この27点の土器のうち最大の長頸壺は容量が48~50リットルであり、ヒッタイト文書に登場する容積単位「パリス *parisu*」=「大きい壺1個分」が現在の度量衡で50リットル程度を指すことが明確になった。また共伴して見つかった他の土器はこの1パリスを単位として、3/4、1/2、1/4、1/8、1/10、1/30、1/100の比率で容量が小さくなっており、容量を意図して規格的に土器が製作されていた可能性を示している (図11)。

またこのクシャックルでの土器セットの発見例と比較することにより、ボアズキョイの「上の町」(神殿地区)で以前に発掘されていた遺構の一つ(6号神殿と26号神殿

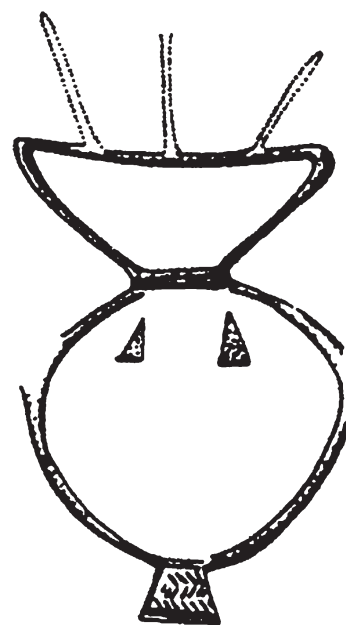


図9 ボアズキョイ出土貼付文土器に表されたストローが挿された高台付壺 (Weisgerber 2005: Abb.10, 2)

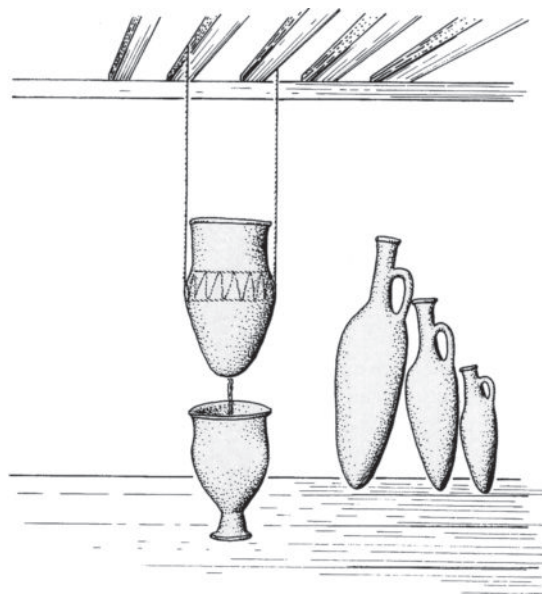


図10 クシャックル出土土器に基づくビール醸造の再現図 (Müller-Karpe 2005: Abb. 8)

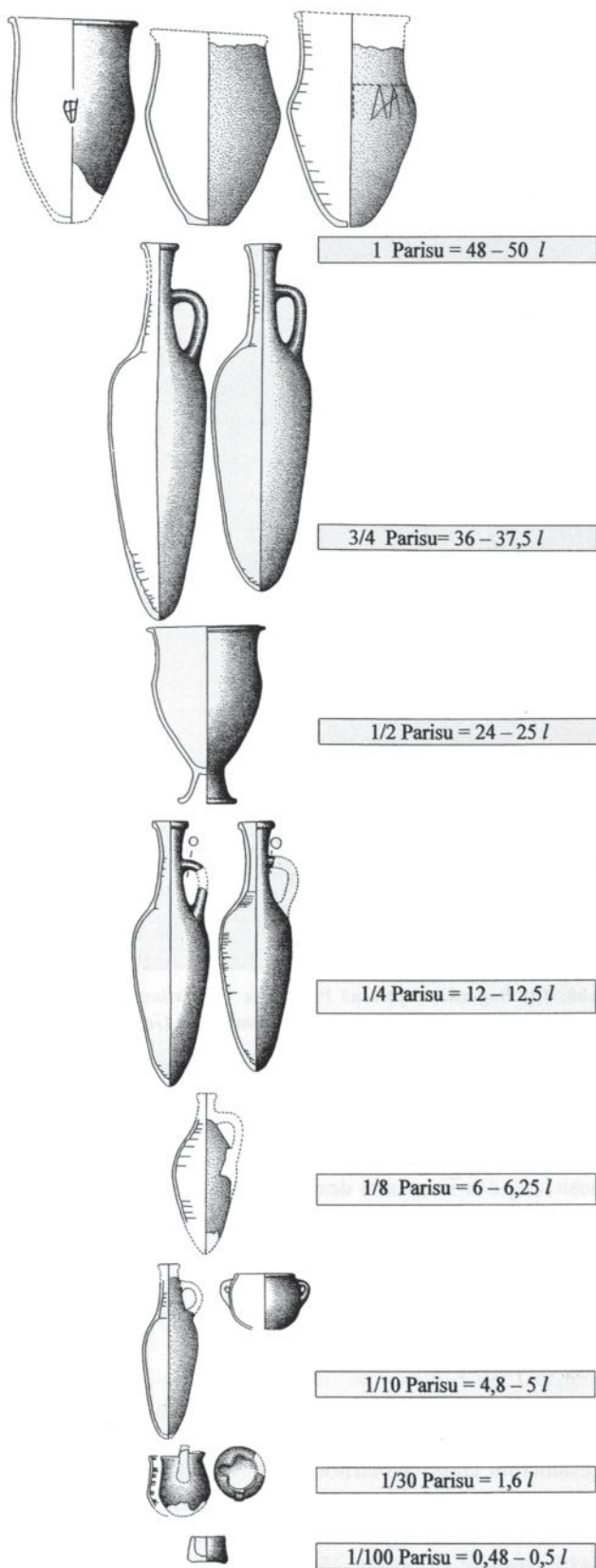


図11 クシャックル出土土器にみる容積単位 (Müller-Karpe 2005: Abb. 9)



図12 キュルテペ出土把手付ブドウ形壺 (Özgüç 2003: 172)

の間にある「5号住居」が、ビール工房（醸造所）であった可能性が指摘された (Müller-Karpe 1988: 173, 2005: 180)。こちらでは発掘当時オオムギの遺存体は発見されていないが、クシャックルと共通する広口壺や長頸壺、浅鉢などほぼ完形の土器13点が発見されている。

当時のビールは保存が出来なかったため、消費される場所ですべて生産されていたと思われ、こうしたクシャックルの神殿やボアズキョイの神殿地区で作られていたビールは、神殿内での祭儀に使われたり、神殿で働く人々が日常生活で消費したりしたのと考えられる。

アナトリアのワイン

ヒッタイト以前のワイン

旧約聖書のノアの箱船の物語（創世記）が伝えているように、ワイン作りが始まったのはアナトリア（東部）であるとする考えが古代人にはあった。実際、現生野生ブドウ種はアナトリアの高原地帯にも分布しており、チャイオニュ (Çayönü)、ジャン・ハサン (Can Hasan)、チャタルホユック (Çatalhöyük) といった新石器時代遺跡からは野生種と思われるブドウの種子の出土例が報告されてい

る。銅石器時代にはワイン生産に使われた可能性のある土器などもみられ、前期青銅器時代には栽培種と思われるブドウ種子の出土例が報告されている（以上 Gorny 1996: 162）。しかし確実なワインの存在を示す考古学的な証拠は、文字史料が登場する時代まで下らなくてはならない。

アナトリアに文字が登場するのは、上記の通りアッシリア商人が交易のため進出してきた前2千年紀に入ってからである。カニシュ（キュルテペ）などに置かれたアッシリア商人の居留地（カールム *karum*）から出土した粘土板文書には、ブドウ栽培 (*qitip karānu*) やワイン取引に関する言及が見られ、地元王侯の宮廷にはのちのヒッタイト時代にも登場する「ワインの長」と呼ばれる役職が存在したことも窺える。

ワイン生産に関する直接的な言及や考古資料は今のところ見つかっていないが、土器や金属で製作された様々な具象的形態のリュトン、とりわけこの時代に特徴的な、ブドウの房の形をした土器（図12）を見れば、ワインが既に飲まれており、また儀礼で重要な意味を持っていたことは容易に想像がつく。このようなブドウの房形土器は、カールムが置かれていたキュルテペ（Özgül 2003: 172）、コンヤ・カラホユック（Konya Karahöyük）（Alp 1999: 75）などで出土している。また一般に「浴槽」と呼ばれている、人間がすっぽり入れる程の大型の方形土器は、この時代以降ヒッタイト時代まで続く特殊な器形であるが、ワインを足で潰して果汁を得るための容器であったとする説もある（Gorny 1996: 163）。

ヒッタイト文字史料に見るワイン

ヒッタイト帝国の時代になると、ブドウやワインに関する言及は飛躍的に増える。ヒッタイト語ではブドウを *wi-yana-* と呼んでいたが（スメログラムでは^(G15) *GEŠTIN*、アナトリア象形文字ではブドウの房の形で表される）、この単語は植物としてのブドウとワインの双方を指しており、飲料か果実かはコンテキストで判断する必要があるが（例えば *GEŠTIN HÁD DU.A* は「干しブドウ（の実）」を指す）、明らかにワインも意味する言葉である（Gorny 1996: 148）。古代地中海世界の言語は全てこの *wiyana* と共通する語根を持っており（古典ギリシア語 *oinos*、ラテン語 *vinum*）、現代の「ワイン」（英語 *wine*、仏語 *vin*）にも通じる言葉であるが、このヒッタイト語に起源があると思われる。なお南西アナトリアのリュキア地方にあったと言及される「ウィヤナワンダ（*Wiyawanda*）」という都市は、ヒッタイト滅亡後の時代には「オイノアンダ *Oenoanda*」と呼ばれローマ時代まで続いているが、「ワイン（ブドウ）の町」という意味をそのまま引き継いでいる（Alp 1999: 72）。

ヒッタイト文書をひもとくと、実に豊富なワインに関する語彙があったことが分かる（Gorny 1996: 150-151; Alp 1999: 69）。「赤いワイン *SA₅ GEŠTIN*」、*「良いワイン DUG.GA* または *SIG₅-an-ta-an GEŠTIN*」、*「純粋なワイン parkui- GEŠTIN*」、*「甘いワイン GEŠTIN KU₇*」、*「酸っぱいワイン GEŠTIN EMSA*」、*「新しいワイン GEŠTIN GIBIL*」、*「辛い（硬い）ワイン karši-GEŠTIN*」、*「古いワイン GEŠTIN EM.SÚ*」、*「古い（年を経た）ワイン GEŠTIN LIBIR RA*」、*「飲むワイン GEŠTIN.NAG*」「ワイン・カクテル（ワインとビールを混ぜたもの） *GEŠTIN.KAŠ*」、*「蜂蜜入りのワイン LÁL GEŠTIN*」、などである（Gorny 1996: 150; Alp 1999: 69）。また役職名としても「御用達ワイン生産者 *LUZA-BAR.DIB*」「ソムリエ^{LÚ.MEŠ} *ZABAR.DIB*」などと訳せる役職があり、また宮廷内では *GAL GEŠTIN*（直訳すると「ソムリエの長」、献酌官）は最も重要な役職の一つであり、現代的な政府の役職でいえば国防相あるいは外相に相当し、通常王弟など王族が就任した（Gorny 1996: 150）。ワインは宗教儀礼にも登場し、飲まれたり神々に捧げられたりした。

ヒッタイト法で定められた価格によれば、銀1シェケル（約12.5g）は大甕（1パリス=40~50ℓ）2個分のワインと等価であるが、これは同量のコムギの1.5倍、オオムギの3倍の価格である。同様に銀1シェケルは1/40エーカー（=100m²）のブドウ畑の値段であったが、これは通常の農地の40倍の価値であった（Gorny 1996: 151）。ブドウ畑を荒らした罪には重い罰が規定されていた。高級ワインが存在したことも文書資料から窺える。総じてワインは権力や宗教に近いところにあった、高級なイメージがある。

一方、ワインに関する考古資料のほうはヒッタイト時代になってもきわめて限られているのが現状である（Gorny 1996: 162）。ブドウ種子の出土例は植物考古学的な分析がなされたほどの遺跡でもみられるが、ワイン生産を示す集中的・大量の出土例はない。またワイン工場の遺構の出土例もない。

ヒッタイト時代の飲酒文化

以下は、ビールとワインに共通するアルコール飲料全般について、または図像や器具などでワイン用であったかビール用であったかが判然としない、飲酒文化全般に関する資料について触れてゆく。

前16世紀頃の高ヒッタイト時代に年代づけられているイナンドゥクテペ（*Inandiktepe*）出土の壺（高さ82cm）に貼付文であしらわれた祭礼場面（図13）は、ヒッタイトにおける祭礼や聖婚の儀式を示す貴重な資料である

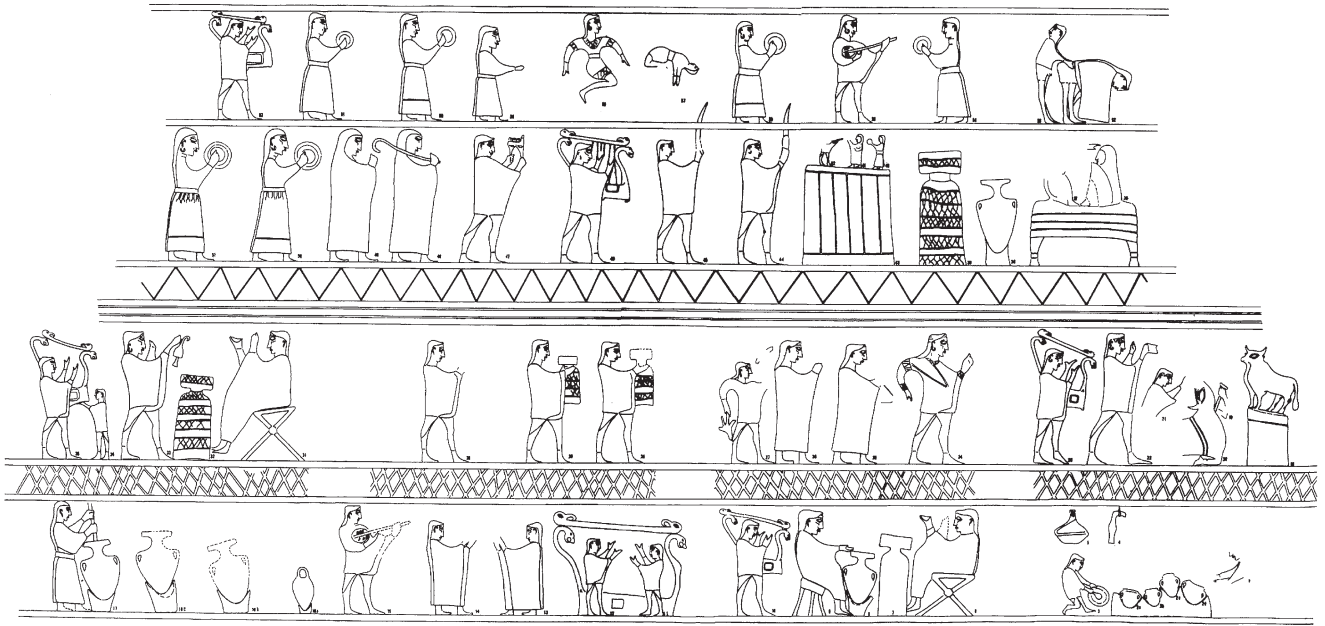


図13 イナンドゥクテペ出土土器に表された儀礼場面 (de Martino 2002: Abb. 1)

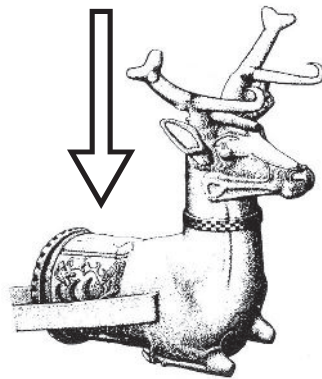
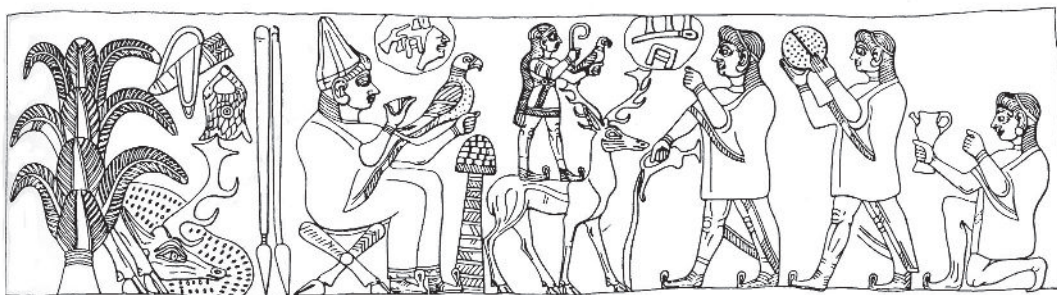


図14 メトロポリタン美術館蔵銀製鹿形リュトンと、刻まれた文様の展開図 (de Martiono 2002: Abb. 2)

(Özgüç 2002: 248-251; de Martino 2002)。場面は四段に分かれており(下から上の順に場面が進行する)、全ての段に竖琴やシンバル、弦楽器?を使った演奏場面が伴っているが、最上段には曲芸と性交(演技?)場面、2段目には祭壇と寝台(婚儀)の場面がある。3段目に供犠場面や複数の人物の行進場面と並んで飲酒場面が登場し、祭壇を

前に椅子に座る人物(神?)が嘴状の注口がついた水差から盃状の酒器に飲料を献酌される場面がある。最下段には、台に載せられた広口壺(調理場面か?)、様々な形の容器、椅子に座って向き合った二人の人物(神々?)の飲酒場面、そして台に載せられた大型の壺に棒を突っ込んでかき混ぜている場面が表現されている。ストローを使って

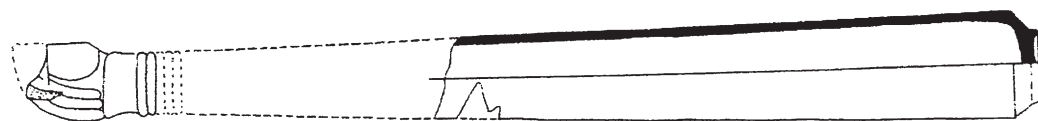


図16 腕形灌奠用土器 (Schoop2011: Fig. 6, 4)

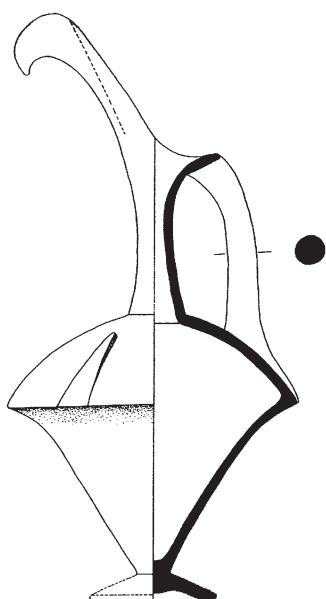


図15 嘴形注口付水差 (Schoop 2011: Fig. 5, 1)

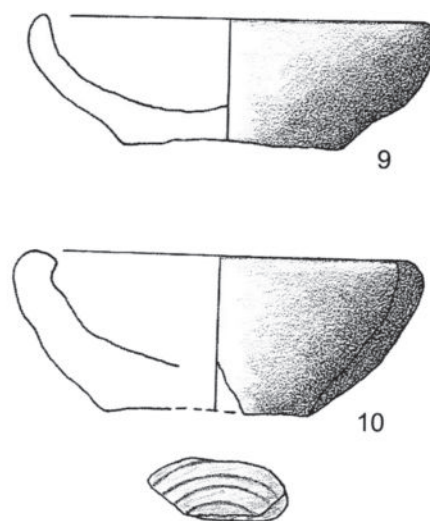


図17 小型杯 (Mielke 2006: Taf. 80)

いないので、この図像内で飲まれていたのはおそらくワインだったと思われるが、確証はない。

リュトン (スメログラムで *BIBRU*) や甕、壺、提瓶、水差といったさまざまな器形の土器 (Özgüç 2002) や金属製容器 (Emre 2002: 232) から、ヒッタイト時代の飲酒文化についての想像をめぐらせることが出来る。出土地は不明ながら、メトロポリタン美術館蔵の銀製鹿形リュトン、ボストン美術館蔵の銀製拳形リュトンはその中でも特に豪華な酒器といえるが、いずれもその表面に神々 (神像) の前で嘴形注口付水差から地面に向かって液体を注ぐ、すなわち灌奠の場面が刻まれており (図14、Müller-Karpe 1988: 26; de Martino 2002)、このような豪華な酒器が宗教儀礼で使用されていたことを示唆している。嘴形注口付水差は実際にアッシリア商業植民地時代からヒッタイト時代にかけてのアナトリアに特徴的に見られる土器の器形でもある (図15、Schoop 2011: 251)。ヒッタイト文書においては *ispantuwa-* と呼ばれるものがこれに相当すると考え

られている (Alp 1999: 70)。

灌奠といえば、ヒッタイトの遺跡から特徴的に出土する、人間の肘から先を模したような土器 (Libation arm、図16) も灌奠に使用されたものと思われるが (Fischer 1963: 72; Müller-Karpe 1988: 145; Parzinger und Sanz 1992: 30; Mielke 2006: 139; Schoop 2011: 254)、このような腕形灌奠用土器は後期青銅器時代のヒッタイト領内 (アナトリア) を中心に、キプロス、パレスチナ、エジプトでも出土している (Mielke 2006: 139)。ヒッタイトの宗教儀礼文書で言及される容器 *kattakurant-* は、この容器を示すと考えられている (Alp 1999: 70)。

ヒッタイトの各種の酒器のなかでも、とりわけ日本の「かわらけ」に似た素焼きで小型 (直径8~10cm) の盃 (図17) は、ヒッタイト時代の前後にはない特徴的な器種であり (ただし前期青銅器時代には同様のものがある)、ヒッタイト帝国後期の遺跡から大量に出土している。全般に粗製であり、底面には糸切り痕が残ったままである。ポ

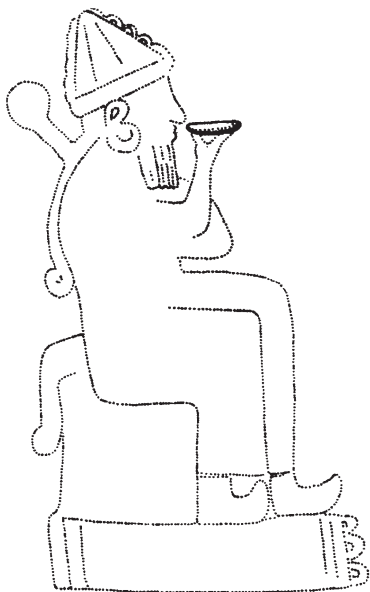


図18 アラジャホユックのレリーフに表された飲酒場面 (Müller-Karpe 1988: 25)

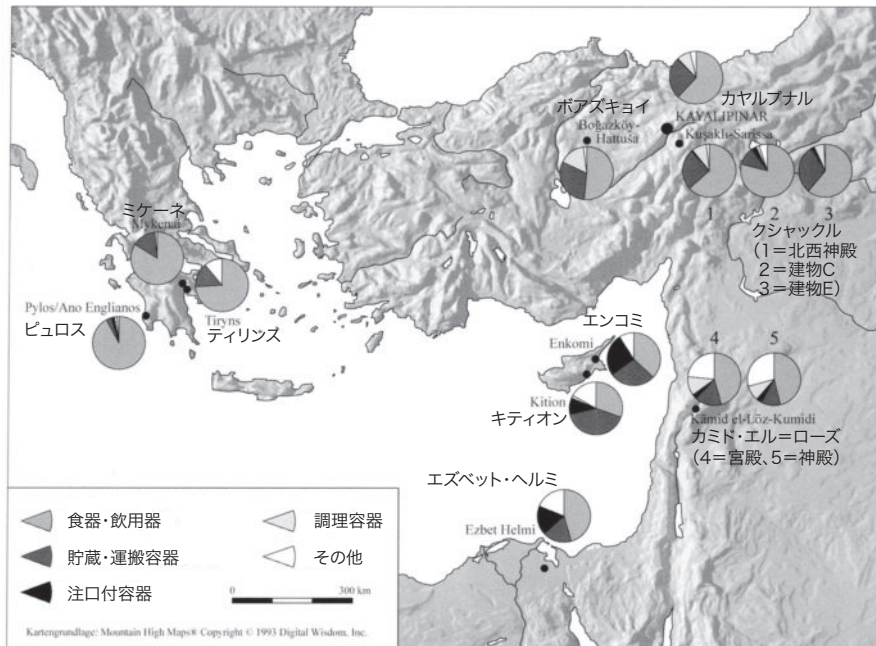


図19 後期青銅器時代東地中海世界遺跡における公共建築物ごとの出土土器の用途別割合 (Mühlenbruch 2014, Karte を改変)

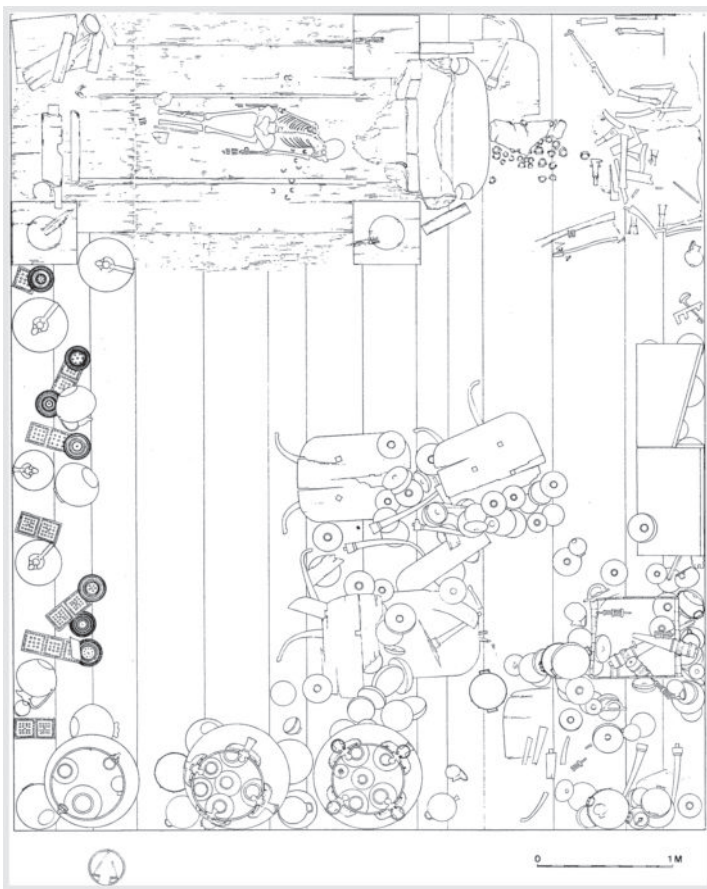


図20 ゴルディオン、トゥムルス MM の墓室内の副葬品の配置 (Young 1982: fig. 66)



図21 イヅリズ碑文に表現されたタルフンタ神 (筆者撮影)

アズキョイ出土のヒッタイト土器を整理・報告したフィッシャーやパルツィンガーはこの小型土器を「ミニチュア・供献土器」として非実用品に分類しているが (Fischer 1963: 69; Parzinger und Sanz 1992: 30)、上記のイナンドウツクの壺の図像、あるいはアラジャホユック (Alacahöyük) やカヤルプナル (Kayalıpınar) で出土した石製オルトスタット (腰羽目板) に刻まれている人物像浮彫 (図 18) には、椅子に座った人物が手のひらサイズの小型盃で何かを飲んでいる場面が表現されており (Müller-Karpe 1988: 26)、小さいながらも実際に使用されていたものと思われる (Müller-Karpe 1988: 123; Mielke 2006: 124; Schoop 2011: 248)。これらの図像資料や、ボアズキョイ・ビュユックカレの宮殿建物脇にある「聖池」の底から大量に集中して発見され、また神殿に多いという出土傾向が示すように (ただし住居址から全く出土しない訳ではない)、この盃もまた日常ではなく通常は宗教儀礼の場面で使用されたようであり、文字史料で言及される *DUG/GIS/URUDU GAL* と関連づけられている。

ヒッタイト帝国に限らず、後期青銅器時代の東地中海世界に共通していることであるが、宮殿・神殿といった権力に結びついた公共建築物におけるもっとも重要な行事の一つが、酒宴の開催であったろう。最近 T. ミューレンブルッフは、それが考古資料の出土傾向、とりわけ最も多く出土する土器にどのように反映されるかを研究している (Mühlenbruch 2014)。ミューレンブルッフは後期青銅器時代における東地中海世界の各遺跡のうち、出土土器片の全点悉皆調査がされた発掘調査に限り、神殿または宮殿とされる公共建築物を抽出し、そこから出土した土器の機種別 (「食器・飲用器」、「運搬・貯蔵用」、「注口付土器 (水差)」、「調理」、「その他」の 5 種に分類) の割合を算出している (図 19)。それによれば、建築物の機能というよりもむしろ地域 (文化) により器種構成の傾向が異なるという結果が得られており (Mühlenbruch 2014: 283-290)、ヒッタイト遺跡の公共建築物から出土する土器のうち、概ね 6 割前後を食器・飲用器、2~3 割を運搬・貯蔵容器が占めており、注口付土器は 1~3%、調理用土器は 2~16% である。

ヒッタイト後の飲酒文化

ヒッタイト帝国の滅亡 (前 1200 年頃) 以後も、ワインやビールはアナトリアの食文化の重要な一端であり続けた。前 8 世紀半ば頃、中央アナトリア西部に栄えたフリュギア王国の都ゴルディオ (Gordion) では、直径 300m の最大の古墳 (Tumulus MM) に葬られた王 (一般にはミダス王とされる) の木槨墓室内には、大小あわせて 157 の各種青銅製酒器が副葬されていたが (図 20)、そのうち

最大の「大鍋」の内容物はワインとビールと蜂蜜種を混ぜた「カクテル」であったことが、ワイン文化の起源を追究してきたマクガヴァンらによる化学分析の結果判明している (McGovern 2003: 286)。王 (支配者) を酒宴の主宰者の姿としてあの世に送る行為は、同時代の地中海世界での文化交流を通じて、遠く中央ヨーロッパにあったケルト人の世界にまで通じている (津本 2014)。

またほぼ同時代である後期ヒッタイト (新ヒッタイト) 文化に属するイヴリズ碑文の浮彫りに表された「ワイン園の (天候神) タルフンタ」は、左手に麦の穂、右手にブドウの房を持つ姿で表されている (図 21、Gorny 1996: 161, Fig. 11. 5)。天候神がもたらす農耕の恵みが、ワインの原料であるブドウと、ビールの原料であるムギに象徴されているのは興味深い。

参考文献

- Alp, S. 1999 *Hittitlerde Şarık, Müzik ve Dans: Hitit Çağında Anadolu'da Üzüm ve Şarık*. Ankara, Kavaklıdere Kültür Yayınları.
- Boehmer, R. M. 1979 *Die Kleinfunde aus der Unterstadt von Boğazköy: Grabungskampagnen 1970-1978*. Berlin, Gebr. Mann Verlag.
- Czichon, R. M. und P. Werner 1998 *Tall Munbāqa — Ekalte I. Die bronzezeitlichen Kleinfunde*. Saarbrücken, Saarbrücker Druckerei Verlag.
- Dörfler, W., C. Herking, R. Neef, R. Pasternak and A. von den Driesch 2011 Environment and Economy in Hittite Anatolia. In H. Genz and D. P. Mielke (eds.), *Insights into Hittite History and Archaeology*, 99-124. Leuven, Peeters.
- Emre, K. 2002 Felsreliefs, Stelen Orthostaten. Großplastik als monumentale Form staatlicher und religiöser Repräsentation. In Kunst- und Ausstellungshalle der Bundesrepublik Deutschland (hrsg.), *Die Hethiter und ihr Reich: Das Volk der 1000 Götter*, 218-239. Bonn, Kunst- und Ausstellungshalle der Bundesrepublik Deutschland.
- Fischer, F. 1963 *Die hethitische Keramik von Boğazköy*. Berlin, Gebr. Mann Verlag.
- Gorny, R. L. 1996 Viniculture and Ancient Anatolia. In P. McGovern, S. J. Fleming and S. H. Katz (eds.), *The Origins and Ancient History of Wine*, 133-174. Amsterdam, Gordon and Breach Publishers.
- Kulakoğlu, F. and S. Kangal (eds.) 2010 *Anatolia's prologue, Kültepe Kanis Karum, Assyrians in Istanbul*. Kayseri Metropolitan Municipality Cultural Publication.
- Kunst- und Ausstellungshalle der Bundesrepublik Deutschland (hrsg.) 2002 *Die Hethiter und ihr Reich: Das Volk der 1000 Götter*. Bonn, Kunst- und Ausstellungshalle der Bundesrepublik Deutschland.
- de Martino, S. 2002 Kult- und Festliturgie im hethitischen Reich. Öffentlicher Ausdruck staatlich-religiöser Interdependenz. In Kunst- und Ausstellungshalle der Bundesrepublik Deutschland (hrsg.), *Die Hethiter und ihr Reich: Das Volk der 1000 Götter*, 118-127. Bonn, Kunst- und Ausstellungshalle der Bundesrepublik Deutschland.
- McGovern, P. E. 2003 *Ancient Wine: The Search for the Origins of Viniculture*. Princeton, Princeton University Press.
- Mielke, D. P. 2006 *Kuşaklı — Sarissa Band 2. Die Keramik vom Westhang*. Rahden/Westf., Verlag Marie Leidorf.
- Mühlenbruch, T. 2014 *Hethitische Keramik im Kontext. Das Gebäude B von*

- Kayalıpınar und die Nutzung institutioneller Gebäude des 2. Jt. v. Chr. im ostmediterranen Raum.* Rahden/Westf., Verlag Marie Leidorf.
- Müller-Karpe, A. 1988 *Hethitische Töpferei der Oberstadt von Hattuša.* Marburg/Lahn, Hitzeroth Verlag.
- Müller-Karpe, A. 2015 Archäologische Beiträge zur Kenntnis hethitischer Maße und Gewichte. In A. Müller-Karpe, E. Rieken und W. Sommerfeld (hrsg.), *Saeculum. Gedenkschrift für Heinrich Otten anlässlich seines 100. Geburtsrags*, 147-160. Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.
- Müller-Karpe, A., G. Wilhelm, V. Müller-Karpe, H. Tsumoto, D. P. Mielke, M. Wilms und R. Pasternak 2000 Untersuchungen in Kuşaklı 1999. *Mitteilungen der Deutschen Orient-Gesellschaft zu Berlin* 132: 311-353.
- Müller-Karpe, V. 2005 Bier und Bierproduktion in Anatolien zur Bronzezeit. In Ü. Yalçın et al. (hrsg.), *Das Schiff von Uluburun: Welthandel vor 3000 Jahren*, 171-185. Bochum, Deutsches Bergbau-Museum.
- Özgüç, T. 2002 Die Keramik der althethitischen Zeit. In Kunst- und Ausstellungshalle der Bundesrepublik Deutschland (hrsg.), *Die Hethiter und ihr Reich: Das Volk der 1000 Götter*, 248-255. Bonn, Kunst- und Ausstellungshalle der Bundesrepublik Deutschland.
- Özgüç, T. 2003 *Kültepe Kaniş/Neša: The Earliest International Trade Center and the Oldest Capital City of the Hittites.* Tokyo, The Middle Eastern Culture Center in Japan.
- Parzinger, H. und R. Sanz 1992 *Die Oberstadt von Hattuša. Hethitische Keramik aus dem zentralen Tempelviertel.* Berlin, Gebr. Mann Verlag.
- Schoop, U.-D. 2011 Hittite Pottery: A Summary. In H. Genz and D. P. Mielke (eds.), *Insights into Hittite History and Archaeology*, 241-274. Leuven, Peeters.
- Ünal, A. 2005 Bier im Alltagsleben und im Kult der altanatolischen Völker. In Ü. Yalçın et al. (hrsg.), *Das Schiff von Uluburun: Welthandel vor 3000 Jahren*, 167-170. Bochum, Deutsches Bergbau-Museum.
- Weisgerber, G. 2005 Biertrinker an Bord? Ein setlener Fund aus Blei! In Ü. Yalçın et al. (hrsg.), *Das Schiff von Uluburun: Welthandel vor 3000 Jahren*, 157-166. Bochum, Deutsches Bergbau-Museum.
- Yalçın, Ü., C. Pulak und R. Slotta (hrsg.) 2005 *Das Schiff von Uluburun. Welthandel vor 3000 Jahren.* Bochum, Deutsches Bergbau-Museum.
- Young, R. S. 1982 *The Gordion Excavations Final Reports, Volume I: Three Great Early Tumuli.* Philadelphia, University of Pennsylvania Press.
- 津本英利 2014 「ケルト人の王墓」アジア考古学四学会 (編) 『アジアの王墓』 261-288 頁 高志書院。

津本 英利
古代オリエント博物館研究員
Hidetoshi TSUMOTO
The Ancient Orient Museum, Tokyo